2025年度札幌市学校検尿の成績と課題

札幌市医師会/札幌市学校医協議会/札幌市学校検尿検討委員会
荒木　義則、長岡　由修、岡本　孝之、佐野　仁美、八十嶋弘一

【はじめに】

札幌市の学校検尿は2023年度に大きな変更を行なった。2022年度以前は一次検査は学校を会場としていたが、全検査を委託機関で実施する方法に変更した。また学校検尿検討委員会を設置した。本報告では2025年度成績を小中学生の結果について要約し、2023年2024年の結果と検討した。

【方法】

一次検査、二次検査については2023年度より全市一斉ではなく日程を分けて委託機関において行っている。一次検査で尿糖が陽性の場合は糖定量検査とケトン体定性検査を追加し、医師の管理下になく、糖定量1,000 mg/dL以上ないし糖定量50mg/dL以上かつケトン陽性であれば、速やかな受診勧告を行っている。血尿蛋白尿について、今年度は尿蛋白クレアチニン比を試行した。2022年度までは全ての結果を学校検尿判定委員会で集約判定ののち、児童生徒への連絡を行っていた。2023年度からは判定基準に沿って適時判定し、連絡を迅速に行っている。

【結果】

学校在籍者数と受検率

2025年度の学校在籍者数は小学生85,290名（前年度比－1,462)、中学生43,722名（前年度比－737）であった。受検率は98.3％であった。2024年度98.0％、2023年度97.1％であり、受検率は年々上昇している。

一次・二次陽性率と要精検率

一次受検者の陽性率は2.8％であり、2024年度2.9％、2023年度3.0％と変化がなかった。二次受検者の陽性率は9.6％であり2024年度10.1％、2023年度9.4％と同等であった。

全受検者のうち要精検となった割合は0.33％(420名)であった。2024年度0.29％(433名)、2023年度0.28％(443名）と変化がなかった。なかでも重篤な病態の可能性の高い専門医受診勧奨数は191名であった。2024年度197名、2023年度212名と同様であった。

医療機関受診率

要精検者のうち、実際に医療機関を受診した割合は60.2％であった。2024年度55.4％、2023年度51.7％と比べ上昇傾向にある。

【考察】

2023年度から従来と異なり、一次検査の時点から尿検体は委託機関に各校からの持ち込みで検査を行っている。従来は学校ごとに学校で試験紙を用いた目視判定を行っていた。より客観性のある判定が可能になったと考えられる。

今年度は尿蛋白クレアチニン比を試行した。二次検査において従来の尿蛋白定量値だけでなく尿クレアチニン値も同時に測定し算出している。実臨床においても尿たんぱくクレアチニン比は一日尿蛋白排泄量を反映する指標として普及している。学校検尿でも有用であり、より重症が予想される者が早期に専門医を受診精査することに役立つと考えられる。次年度より本格運用を開始する予定である。二次検査者のみが対象であり費用対効果は十分と考えられるが今後も検証を続けていく。

尿糖についても従来の尿糖定量だけでなく、尿糖定量50mg/dL以上の検体に関しては尿ケトン定性測定が行われている。これにより重篤な病態である糖尿病性ケトアシドーシスを早期に疑うことが可能となった。

要精検者の医療機関受診率は年々上昇している。しかしまだ十分な数字とはいえない。札幌市学校検尿検討委員会と札幌市教育委員会が共同してさらに受診率が向上するように啓蒙活動やシステムの改善に取り組んでいく。

検診における検尿は自覚症状出現前の病初期に診断治療を開始する契機となり非常に有用である。特に学校検尿は病状の進行の早い小児に対して必要不可欠なシステムである。それをさらに有意義なものにするには受検率と精査対象と判定された者の医療機関受診率を上げていくことが重要である。

現在は学校検尿結果と精検後診断名の一対一対応が十分に行われていない。検査結果により受診勧奨先をか

かりつけ医、専門医と分類しているが、一対一対応を進めることによって判定基準の妥当性や必要性の有無を今後検証していく予定である。札幌市の学校検尿が他の自治体と比べ、より有用性の高いものとなるように今後も進めていく。

【参考文献】

令和７年度札幌市学校検尿検討委員会会議資料（2026年３月４日．札幌市教育委員会会議室）